

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：40124

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K20227

研究課題名(和文) 不就学状態の外国人児童生徒に対する外国人散在地区内日本語教室の認識に関する調査

研究課題名(英文) Survey Regarding School Non-Attendance of Foreign Students and Japanese Language Class Staff Perceptions Thereof in Foreigner-Displaced Areas

研究代表者

奴久妻 駿介 (Nukuzuma, Shunsuke)

北海道武蔵女子短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：50911187

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は以下の二点である。第一に、予備調査として、外国人児童生徒に関わる有識者会議の議事録を整理し、テキスト分析を行った。多文化主義の理論(「リベラルな形態の多文化主義」およびコミュニタリアニズム的思想)を援用しつつ、外国人児童生徒を取り巻く言語教育の位置づけを考察した。第二に、2022年に「日本国内の外国人児童生徒の社会構成的文化に関する一考察」というタイトルで、学会発表を行った。外国人集住都市会議のテキスト分析及び、不就学者と関わった経験のある関東圏の2教室と外国人散在地域の2教室のデータ整理を行った。各アクターの役割の違いを、多文化主義の理論(「構成的」なきずな)から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで外国人児童生徒の教育研究と政治理論の多文化主義を結び付ける研究は少なかった。それは、これまで同領域が主に、ケーススタディや問題解決に焦点を当てており、多文化主義との接点が不足していたという背景がある。日本の外国人児童生徒の教育研究は海外のジャーナルには僅かしか掲載されておらず、グローバルな読者にその重要性が伝わりにくい、と認識される事もある。そのため、日本の研究と英語圏の理論との接点を築くことは重要である。また、多文化主義は国家レベルでの理解が求められるが、実際の運用は現場の人々に委ねられている。本研究では、現場の人々の視点から多文化主義を抽出することを通じた、新たな発見があった。

研究成果の概要(英文)：The results of this study can be summarized as follows. First, for the preliminary study, it organized and textually analyzed the minutes of the expert meetings on international students. I analyzed the position of language education surrounding international students with the help of the theory of multiculturalism ('liberal form of multiculturalism' and communitarian theory). Second, in 2022, I gave a presentation at a conference entitled 'A Study of the Societal Culture of Foreign Students in Japan'. This study analyses the text of a conference on areas with a high concentration of foreign residents and the data of two classrooms in the Kanto region and two classrooms in areas. All the regions had scattered foreign residents who had experience of working with international students who were not attending school. The different roles of each actor were examined in terms of the theory of multiculturalism ('constitutive' bond).

研究分野：比較教育学

キーワード：多文化主義 外国人児童生徒 市民的ナショナリティ リベラリズム コミュニタリアニズム 日本語教育 母語教育 不就学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本国内に在住する外国人児童生徒の不就学の現状は、マスメディアを通して世間の耳目を集め、国や自治体レベルでもその事は広く認識されてきている。特にソーシャル・ネットワーキング・サービスでは、現場レベルの支援者の立場からも外国人児童生徒の日本語教育の機会確保や人材確保、そして予算等の様々なトピックが言及される事がある。つまりそれは、日本国内の多文化共生の基盤として、外国人児童生徒の教育に関わる内容が重要なテーマとなっている事の現れと言えるだろう。しかし、そのような現状がありながら、不就学者を含む外国人児童生徒との直接的なコンタクトが予想される地域内日本語ボランティア教室スタッフの、多文化主義を関連させた認識の詳細な調査はほとんどされてはこなかった。特に各教室の支援が外国人児童生徒という対象を通して、どういった社会を構築していくのか、というシティズンシップとコミュニティの関係性を明らかにする事は、多文化主義の面からも極めて重要なテーマである。そこで本研究は、国と自治体レベルの多文化主義の方向性を相対化するため、不就学の外国人児童生徒を受け入れたことのある日本語教室への質問票及びインタビュー調査を実施した。本研究の成果を通して、日本の草の根からの多文化主義モデルを構築する事をねらいとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国と自治体の外国人児童生徒の教育に関する議論について、テキスト分析を通し、マクロなアクターの多文化主義の方向性を明らかにし、その結果が、不就学者を含む外国人児童生徒の受け入れ経験のある地域の日本語教室の認識とどのように関連しているかを、多文化主義の理論枠組み (kymlicka, 2002=2005; Taylor, 1993; Walzer, 1994=1996) を基に明らかにすることである。また、本研究が外国人児童生徒研究の領域にどのように貢献するかについて付言すると、第一に、北米の多文化主義理論が、日本の当該領域において、十分に活用されていないという実態があるため、政治理論との接続という新規性のある試みであることが上げられる。第二に、不就学を含めた外国人児童生徒を政治理論的な視点で考察する際に、これまでは国の政策がアクターとして対象にされてきている事が多かった。しかし、実際に政治理論としての多文化主義は、日本語ボランティア教室というローカルなアクターの意向によって、草の根から構築されるという点があり、本研究では特に、マクロとミクロが連動して多文化主義を形成していく、という磁場の詳述を狙いとする事ができた。

3. 研究の方法

本研究の研究方法について説明する。第一に、予備調査として、「外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議」のテキスト分析を行い、多文化主義の理論枠組みから、国レベルでのマクロな考察を行った。第二に、過去のデータ整理として、2014年段階の不就学者受け入れ経験のある15箇所の地域の日本語教室からすでに得ているデータを表にまとめた。その内、関東圏の日本語教室2箇所から得た質的データを参考に、外国人児童生徒を取り巻く日常的な環境によって、児童生徒の不就学状況が継続する事例と、草の根のサポートによって就学に繋がった事例の文字データに対してコーディングを行った。第三に、2022年4月に実施したアンケート調査の結果、外国人散在地域にある2箇所の日本語教室スタッフから具体的な回答を得られた。いずれも2014年から2021年の間に不就学児童生徒の受け入れを行ってはいなかったが（その内1箇所では、就学状況が不明な児童生徒がいた）、その間同教室に在籍していた児童生徒の情報提供や、教室内での外国人児童生徒の教育に関する教室スタッフの認識を知ることができた。

4. 研究成果

研究実績として、まず、予備調査の詳細と成果発表について以下に示す。

第一に、2014年調査済みの不就学の外国人児童生徒の受け入れ経験のある15箇所の日本語教室スタッフを対象に、(1)2014年段階の過去のデータを整理し、(2)それらの教室13箇所へ新たに2022年のアンケートによる追跡調査を実施した。内容としては、2014年から2021年のおける、新規の不就学児童生徒の受け入れの有無と、外国人児童生徒に関連する諸課題への認識についてであり、それらの予備調査を完了した。結果、外国人散在地域内の日本語教室2箇所のスタッフから情報を得ることができた。この結果は、後述する多文化関係学会第21回年次大会での口頭発表の業績に繋がる。第二に、理論枠組みの設定としては、多文化主義を巡る知見 (kymlicka, 2002=2005; Taylor, 1993; Walzer, 1994=1996) を援用し、「外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議」及び「外国人集住都市会議」のデータを、KH Coder (樋口, 2020) を用いてテキスト分析した。結果、いずれの会議でも、決して母語教育が無視されている訳ではなかったが、日本語教育が議論の前提事項として捉えられているケースが多く見られた。すなわち、日本の地域共同体への外国人児童生徒の参加を念頭に置いた議論が多く展開していた。本成果はそれぞれ、2022年2月19日に開催された、国際ボランティア学会第23回大会の「外国人集住都市会議における「日本語」と「母語」の位置づけ：外国人集住都市会議2005年から2019年の議事録分析」及び、『現代社会学研究』35号の「日本の外国人児童生徒と多文化主義—『外国

人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議』(査読有り)として発表した。

最終年度に実施した研究の成果としては次の三点が挙げられる。

第一に、2022年10月15日に開催された多文化関係学会第21回年次大会での口頭発表(オンライン)である。ここでは、「日本国内の外国人児童生徒の社会構成的文化に関する一考察—国・自治体と地域日本語教室の対比から—」というタイトルで発表をし、その狙いを、外国人集住都市会議のテキスト分析及び、不就学の外国人児童生徒に関わった経験を持つ日本語ボランティア教室への質的調査を基に、複数の草の根の組織ごとの意識の違いに焦点を当て、多文化主義の理論(Will Kymlickaの批判した『「構成的」なきずな』)からその特徴を描き出すこととした。その結果、関東圏のA教室及びB教室(過去に調査を実施した分)に加え、外国人散在地域のC教室およびD教室にメールでの聞き取り調査を行った。結果、国や自治体が日本の共同体への包摂という『「構成的」なきずな』寄りの意見交換をしてきた一方で、その『「構成的」なきずな』の実現性は、地域日本語教室の関わり方に大きく左右されている面があることが明らかとなった。

第二に、外国人散在地域Eにある、市、夜間中学、日本語ボランティア教室、外国人学校それぞれのアクターの外国人児童生徒の教育に対する役割を、Brian BarryのWill Kymlickaに対する多文化主義を巡る批判(Barry, 2002)から考察を行った。その研究成果は、海外ジャーナルに投稿予定である。

最後に、今後の課題を二点述べる。第一に、2022年8月26日に実施した外国人散在地域Fでの調査内容については、今後、論文として発表をしていく予定である。第二に、2023年1月16日に実施した日本語ボランティア教室Gのスタッフ二名へのオンラインでのインタビュー調査については、そこから得たヒントを基に、教室Gが所在する市内の外国人児童生徒に関わるアクターの分析を行っていく事とする。そして、更なるデータや追跡調査を行い、分析データを追加していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 奴久妻 駿介	4. 巻 35
2. 論文標題 日本の外国人児童生徒と多文化主義 「外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議」の関連語分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代社会学研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7129/hokkaidoshakai.35.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 奴久妻 駿介
2. 発表標題 外国人集住都市会議における「日本語」と「母語」の位置づけ：外国人集住都市会議2005年から2019年の議事録分析
3. 学会等名 国際ボランティア学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奴久妻 駿介
2. 発表標題 日本国内の外国人児童生徒の社会構成的文化に関する一考察 国・自治体と地域日本語教室の対比から
3. 学会等名 多文化関係学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------